

知らない間の出来事

あゆみの回想

(九月一日)

いよいよ、新しい学校での生活が始まった。父の転勤とはいえ転校は不安だったが、自己しうかいの後、みんなから拍手をもらい、これから楽しくやっていけそうな気がした。

ちょうど、校門から道路に出ようとするとき、同じクラスのみかさんに声をかけられた。

「ねえ、あゆみさん。私たちなんだか仲良しになれそうな気がするの。その訳は後でゆっくり話すね。で、早速だけど、これから一緒に遊ばない。時間と場所は後でメールするから、携帯電話のメールアドレス教えて。」

「こちらこそ、よろしく。でも、ごめんね。私、携帯電話……、持っていないの。その代わりに、うちの家の電話番号、教えるから。」

と、言って、メモ用紙に家の電話番号を書いてわたした。

みかさんは、メモ用紙を受け取ると、がっかりした様子で、

「えっ、携帯持っていないの。ううん、じゃあ、またね。」

と、言って、帰ってしまった。

私が前にいた学校では、携帯電話は本当に必要なかったし、親からもまだ早いだろうと言われていたので、持っていなかったのだ。

(九月二日)

新しい学校での二日目。教室に入ると、みんなの視線が何だか自分に向けられていることに気付いた。思い切ったとなりの席の男子に聞いてみた。

「ねえ、なんでみんな私の方を見ているんだろう。」

「それはね、たぶん、あゆみさんのことが書かれたメールのことだと思うよ。」

「えっ。何て書いてあったの。」

「今度転校してきたあゆみさんは、前の学校で仲間外れになっていたの、この学校に転校してきたんだって。ねえ、それ本当なの。」

私の心は、おどろきでいっぱいになった。

(どうして私がそうになってしまうの。このままだと本当に仲間外れになってしまう。)

私は、どきどきする胸の鼓動を聞きながら、帰りの会で発言した。

「私は、前の学校で仲間外れにされたりしていません。みんなと仲良しでした。」

根も葉もないことをメールで勝手に流されたりして、とても悲しいです。

みんながメールのことを本気にしてしまうといやなので、

勇気を出して言いました。」

帰りのあいさつの後、先生が声をかけて

くれたが、わき目もふらず家に帰った。

「あゆみに電話よ。」という母の声が聞こえてきたのは夕方四時ごろだった。



根も葉もない
全く理由がない。

みかの回想

(九月一日)

二期が始まった日、転入生をむかえた。転入したあゆみさんは自己しようかいでこんなことを言っていた。

「私は、漫画が好きで、読むのもかくのも両方好きです。特に、最近は漫画をかくことに夢中です。早くみんなと友達になりたいです。よろしくお願いします。」

私はびっくりした。それは私の趣味と全く同じだったからだ。私も漫画が大好きで、最近はいくほかに夢中だった。

(よし、あゆみさんと友達になって、漫画をかくて遊ぼう。)

まずは、メールアドレスを聞いて、それから遊ぶ時間と場所を決めようと思い、あゆみさんに声をかけた。

私は、再びびっくりした。あゆみさんは、携帯電話を持っていなかった。せっかく、漫画の話ができると思ったのに……。家の電話番号が書かれたメモ用紙は、小さく丸めて、ポケットにつっこんだ。

もしかして、あゆみさんが携帯電話を持っていないということは、友達と連絡できないということ……。ということは、友達がいらない子だったのではないか、などと思い、

《今度の転校生、携帯持っていないんだって。友達あまりいないみたい。これは推測だけど。》と、メールに書いてクラスの友達に送った。

(九月二日)

朝、教室に入るとクラスのみんながあゆみさんのことをうわさしている声が耳に入った。

授業も終わり、帰りの会で、いきなりあゆみさんが手を挙げて言い出した。それは、前の学校の根も葉もないことをメールで流されたということだった。なんで、そんなことがメールで流れたのだろう。

放課後、クラスの友達に聞いてみた。

「さっきのあゆみさんの話だけど、どんなことが書いてあったの。」

「私のメールには、『今度の転校生は、携帯を持ってないから、仲間外れにされて、この学校に入ってきたらしい。』と、書いてあったよ。」

私は、それを聞いて、はっとした。まちがいない。それは、私が書いたメールがいつの間にかこんなことになっていたのだ。私の思いこみがこんなことになってしまふとは……。

頭の中は、あゆみさんのことであっぴいになった。

私が、電話番号の書いてあった紙をきれいにもどし、あゆみさんの家に電話したのは夕方のことだった。

